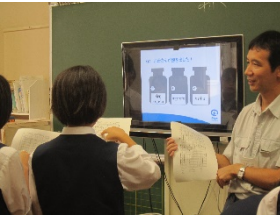


プラン・フレンズ (NGOプラン・ジャパン開発教育ボランティア)

タイトル	市民ボランティアによる開発教育～途上国の女の子の現状を学ぼう～
応募者氏名	プラン・フレンズ (NGOプラン・ジャパン開発教育ボランティア)
作品を通して伝えたいこと	<p>プラン・フレンズは、NGOプラン・ジャパンに協力する15名の市民ボランティアによる開発教育グループである。2007年に活動を開始し、特に2013年7月からは、途上国の女の子が置かれている厳しい現状について、日本の子どもたちが共感的に学び、自分たちにできる支援を考える機会を提供してきた。途上国の女性の現状は、MDGsの最終報告でも深刻さを指摘されており、その改善が途上国の貧困削減、生活改善にも大きく寄与する。日本の子どもたちに、このような問題に関心を持って学習を進めてほしい。</p> <p>職業・年齢・性別が多様な一般市民が主体となって、日本の子どもたちを対象とする開発教育を実践することで、市民同士の学び合い (Peer Education) を広めてきた。本取り組みでは、学校やNGOだけではなく、開発教育において一般市民にもできることがあるという実例を示してきたことが特徴である。</p>
実践者氏名/団体名	プラン・フレンズ (NGOプラン・ジャパン開発教育ボランティア)
実施日・期間	2013年7月～2015年8月
主な実施場所	東京・埼玉・神奈川の小学校・中学校・高校、およびプラン・ジャパン事務局
取り組みへの参加者及び人数	東京・埼玉・神奈川を中心とする12都府県の小学生・中学生・高校生および保護者、計941名
目標・ねらい	<p>15名のプラン・フレンズが役割分担をしながら、以下の4つのステップで、日本の小学生・中学生・高校生が、途上国の女の子の現状を学び、自分たちにできる支援を考える機会を提供する。そして、これらの学習を提供することにより、市民同士の学び合い (Peer Education) を深める。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 途上国の女の子の現状を理解する 女の子だから学校に行かせてもらえない、家の仕事をしなければならない、早すぎる結婚や出産、といった途上国の女の子の現状を共感的に理解する。 2. 女の子への教育支援の重要性を理解する 母親の識字率や就学率の向上が、乳幼児の生存率や家計の向上につながるなど、女の子への教育支援が途上国における生活改善、貧困削減において重要であることを理解する。 3. 問題解決に向けて国際社会が尽力していることを理解する プラン・ジャパンによる女子教育支援を例として、途上国の女の子を支援するために国際社会が支援を行っていることを理解する。 4. 身近な支援の実例を知り、参加する 身近なボランティア活動への参加、啓発キャンペーンへの協力、政府や国連への政策提案など、具体的なアクションの例を学ぶことで、私たち市民にもできる支援の実例を知り、参加の機会を得る。
具体的な取り組み内容及び工夫・配慮した点等	<p>【具体的な取り組み】</p> <p>15名のプラン・フレンズが役割分担をしながら、以下の3つの形態で、日本の小学生・中学生・高校生を対象とする開発教育を行った。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 夏のワークショップの開催 (2回実施、計89名参加) 8月に、公募で集まった小学生・中学生・高校生を対象に、プラン・フレンズが独自に開発した教材を体験するワークショップを開催した。小学校の中・高学年から中学生、高校生までの異年齢集団が一緒に学ぶことで、子どもたち同士の間での学び合いの効果も生まれた。特に高校生には、ボランティアとしてワークショップ運営に参加することで、自ら学びつつ伝える側に立つ体験を提供した。



夏のワークショップ



出張授業



事務局ワークショップ



水汲み体験



「世界がもし25人の村
だったら」ワーク

教材・資料

2. 小学校・中学校・高校での出張授業 (9回実施、計730名参加)

首都圏の小学校・中学校・高校からの依頼に応じて、プラン・フレンズ1～2名が講師として出張し、授業を行った。授業の時間数は1時間の単発授業から5時間の連続講座まで、対象人数は10名前後の小規模授業から240名の大講義まで、学校側の要望に合わせてアレンジした。

3. 事務局でのワークショップ開催 (14回実施、計122名参加)

プラン・ジャパン事務局を訪問する全国各地からの中学生・高校生を対象に、途上国の女の子の現状について理解を深め、問題解決に向けてNGOが取り組んでいる活動を紹介するワークショップやボランティア体験を提供した。

【工夫・配慮した点】

授業やワークショップの中で、以下の点を盛り込むように工夫した。

1. 模擬体験を取り入れる → 「気づき」をうながす

教え込みではなく、「気づき」をうながす授業・ワークショップとなるよう、水運び体験、女の子の成長すごろく、生活劇づくりなどによって途上国の子どもたちの暮らしを参加者が模擬体験し、共感的理解を深める工夫をした。

2. 具体物の提示 → 異文化でくらす子どもたちの「存在」を実感する

アジア・アフリカ・中南米の民族衣装、子どもたちが実際に使っていた教科書や制服、子どもたちが手作りしたおもちゃ・絵・エッセイなどの具体物を使用することによって、遠く離れた地域でくらす子どもたちの「存在」を実感し、イメージを膨らませるようにした。

3. 生き生きとした姿を伝える → 尊厳を尊重する

それぞれの国の魅力的な点や、子どもたちの日常的な楽しみなどの話も取り上げることで、「かわいそう」だけではない途上国の子どもたちの生き生きとした姿を伝え、相手の尊厳を重視する姿勢を伝えた。

4. 映像や画像の利用 → 途上国の子どもたちの思いに「共感」する

NGOプラン・ジャパンの現地プロジェクトの一環として途上国の子どもたちが制作した映像や画像を利用することによって、同年代の子どもたちが考えていること、感じていることを共感的に理解しやすくした。

5. 参加者同士のコミュニケーション → 学び合いを広げる・深める

授業・ワークショップにおいて、参加者同士の意見交換を重視することで、学び合いが子ども同士の間にも広がっていくことを大切にした。特に夏のワークショップでは、学年を超えた子どもたちが一緒に模擬体験に取り組むことで、学び合いが深まっていくことを期待した。

6. 具体的なアクションの提示 → すぐに参加できる機会を提供する

Raise Your Hand(後述)など、すぐにできる具体的なアクションの例を示すことで、子どもたちに支援への参加機会を提供した。

7. メンバーの経験を活かす → 身近な支援の実例を伝える

プラン・フレンズはそれぞれに仕事や家庭を持つ一般市民でありながら、途上国の問題に関心を持って開発教育ボランティアに参加している。それぞれがアジア・アフリカ・中南米の途上国を訪問した経験や、仕事で培ってきた知見を授業に反映させることで、私たち一般市民でも途上国の問題に関わることができることを示した。

参加人数や学校側からの依頼に応じながら、以下の4つの教材を中心として、各プラン・フレンズの体験を交えた授業内容を組み立てた。

教材1. 体験ゲームで知ろう！世界の子どもの今

教材2. 途上国の子どもたちの願いを学ぶ「夢のこいのぼり」読み解き

教材3. 途上国の女の子の暮らしを学ぶ「シータちゃんの日」

教材4. 途上国の子どもたちの思いを知ろう！「私が世界の大統領だったら」エッセイ

⇒教材1～3は参考資料にて詳しく紹介する。

成果



すごろくゲームで途上国の女の子の人生を学ぶ



現地を訪れるメンバー



Raise Your Hand

今後の展開、発展 (この取り組み の生かし方)



さいたま国際友好フェア

約2年間の取り組みによって、以下の成果が得られた。

1. 活動実績

- ・夏のワークショップ：2回の開催で、計89名の子どもと保護者が参加
- ・事務局でのワークショップ開催：10都府県から計14回、122名が参加
- ・小中高校での出張授業：3都県の9校で実施、計730名が参加

2. 難しい問題をわかりやすく学び、共感的に理解した

早すぎる結婚や出産、家事労働での酷使、学習機会の喪失といった、深刻な問題を、ゲームや創作劇などの模擬体験を通して学ぶことで、低学年の子どもでも抵抗感なく共感的に理解することができた。(ワークショップ参加者(中3)の感想:「今日学んだことは国際的にも難しい問題なのにゲーム感覚で教わることでよく学ぶことができた」)

また、途上国の子どもたちが作成した絵やエッセイ、映像に接することで、相手を尊重する気持ちが芽生え、問題解決に参加しようとする意欲が高まっていることがうかがえた。

3. 学び合いが広がった

援助機関の職員ではない、一般の会社員や公務員、主婦であるプラン・フレンズが、開発教育に携わり、途上国支援の一翼を担っている姿を示すことで、「専門家ではなくてもできることがある」というモデルになった。

その後、授業やワークショップに参加した生徒が文化祭で途上国の女の子の現状を取り上げる発表をしたり、生徒会主導で募金活動や書き損じはがき集めを実施するなど、「学び合い」の輪が広がっている。

4. 「日本にいる私たちにできること」の小さなステップを示した

途上国の女の子の状況を改善するために、一般市民の私たちが日本にいながらにしてできる具体的なアクションの例を示すことで、子どもたちの参加意欲を涵養することができた。

例1. Raise your hand:手を挙げた写真を撮ることで、女の子への支援を望む意思を表明し、国連事務総長や国際社会のリーダーたちへ送って、女の子の教育環境の整備を働きかける啓発キャンペーン。

例2. 書き損じはがきの回収:学校内で書き損じはがきを回収し、換金して途上国支援への寄付金とするキャンペーン。

1. 学び合いのさらなる広がり:対象の拡大

今までは子どもを中心に開発教育を実践してきたが、今後は大人にも対象を広げたい。すでに埼玉や千葉で、途上国の女性問題を扱った映画上映会を開催し、ワークショップを行っている。これまでにワークショップに参加した子どもたちがこうした場で発表するなど、子どもから大人への発信に挑戦し、学び合いをさらに広めていきたい。

2. 学び合いのさらなる広がり:他のボランティア・グループとの連携

高校生・大学生のボランティア・グループや地域の市民グループと共同でワークショップを開催したり、教材の改善に向けた意見交換会をするなど、連携を進めたい。すでに、ユース・グループと教材開発の意見交換をしたり、さいたま市の国際友好フェアにおいて市民グループと共同のワークショップを開催した経験がある。こうした機会を増やすことで学び合いを広め、深めていきたい。

3. 教材をパッケージにして学校などに提供していく

プラン・フレンズが開発した教材をパッケージ化して、学校教員や開発教育に取り組むグループが活用できる形にして提供する。それを通じて、共感的に途上国の女の子の現状を学び、支援への参加意欲を育成する機会をさらに増やしたい。また、アクティブラーニングの実践に取り組む学校教員に活用してもらうことで、開発教育の機会を広めたい。

参考資料

1. 教材

教材 1 体験ゲームで知ろう！ 世界の子どもの今

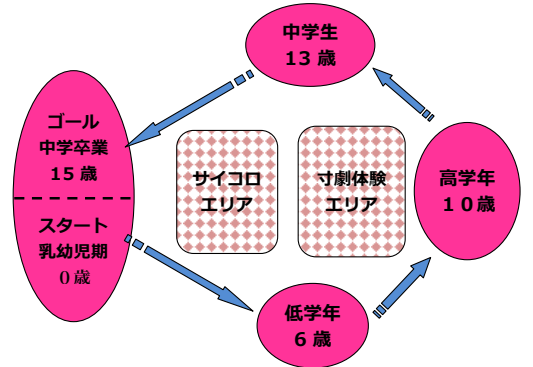
✓ 「体験ゲームで知ろう！ 世界の子どもの今」とは・・・途上国の女の子が生まれてから中学卒業までの成長過程にいくつかのチェックポイントを設定し、子ども自身がコマとなり、各ポイントでサイコロを振りながら、ゴールを目指す。

✓ 教材のねらい・・・ゲームを楽しみながら途上国の女の子の成長を疑似体験することができる。その中で、成長する喜びと厳しい現状を体験的に理解するとともに、参加者同士で境遇の違い(サイコロの目の結果)を知り、途上国の女の子の現状を様々な視点から理解する。

✓ 活用実践例・・・「夏のワークショップ 2015」の構成とルール

31名の参加者を5つのグループ(村)に分け、村からの代表者をコマとした。

各ポイントでサイコロを振り、サイコロの目によって成功または失敗となり、失敗した場合、コマの人は同じ村の仲間と交代していく。全員失敗した場合はその村は終わりとなることとした。ポイントは次の4つを設定し、成功・失敗のそれぞれで異なる体験的な寸劇に参加し、疑似体験を促した。



	年齢	各ポイントの目標	体験的寸劇	成功のサイコロの目
1	0歳	乳幼児期：6才までの生存、小学校入学	小学校入学証書授与(成功)	3～6
2	6歳	低学年：小学校の学業の継続	水汲み体験(失敗)、賞状授与(成功)	4～6
3	10歳	高学年：小学校卒業、中学校入学	家事手伝い体験(失敗)、入学証書授与(成功)	4～6
4	13歳	中学生：中学校の卒業 >>ゴール 15歳	早婚体験(失敗)、卒業証書授与(成功)	4～6



1. ゲームの前のアイスブレイクの様子です。真ん中の衣装を着た人は、大学生のボランティアの人ですね。ゲームを進行するボランティアにとっても貴重な体験です。がんばれ！



2. 各村では高校生のボランティアが中心となって、参加者を取りまとめました。年齢の違う参加者たちの気持ちを一つにしてゴールを目指そう！



3. 村の代表者がサイコロを振ります！おおきなサイコロを勢よく投げて、サイコロの結果に一喜一憂。みんなの元気な声が会場に響きまです。



4. 6歳のポイントの「水汲み体験」の様子。「途上国の女の子ってこんなに重い水がめ運んでるの!？」なんて声が聞こえてきます。児童労働のほんの一部を体験してもらいました。



5. 13歳のポイントの「早婚体験」の様子。「中学校を卒業間近にして、知らない男の人と無理やり結婚させられるなんて、、、」ゲームとはいえ、不安な気持ちになりますね。途上国の女の子の気持ちに少し近づけたかな。



6. ゲームの後は感想を共有します。サイコロが成功した子、失敗した子、小学生、中学生の子がそれぞれの気持ちや考えを述べ、立場の異なる人の状況を理解します。「小学校卒業が当たり前ではないと実感した」という声も。

教材2 途上国の子どもたちの願いを学ぶ「夢のこいのぼり」読み解き

✓「夢のこいのぼり」とは・・・途上国の子どもたちが、自分たちの村の問題を話し合い、その現実を大きなこいのぼりに描いた。裏面にはこんな村にしたいという理想が描かれている。43カ国のこいのぼりがある。下はケニアのもの。

現実



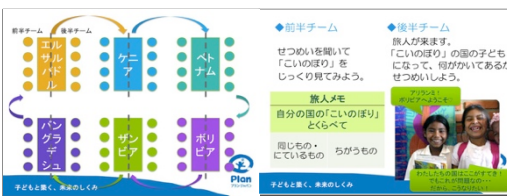
早すぎる結婚や妊娠
安全でない水
毎日なんども水くみ

理想



タンクの蛇口をひねれば
きれいな水が出てくる
リボンをつけて
オシャレもしてみたい

✓活用実践例・・・「夏のワークショップ 2013」 この「夢のこいのぼり(プラン・ジャパン提供)」を題材に、参加型授業を組み立てた。子どもたちは、6つの国(エルサルバドル、ボリビア、ケニア、ザンビア、ベトナム、バングラディシュ)にわかれて、その国の子どもたちがこいのぼりに何を描いたのか、小さい子は絵をヒントに、大きい子はその国の基本情報や死亡率、就学率等の各種の開発指標も参考にして読み解いていく。読み解いたあとは、他の国のグループを訪ねて、子ども同士で説明しあう。プラン・フレンズは、ファシリテーターとなって気づきを促し、子ども同士がそれを共有する手助けをする。



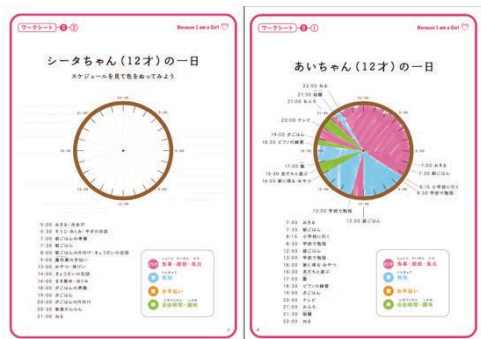
①途上国の子どもたちは、この絵でどんな問題を伝えようとしたのかな? みんなで考えてみよう。

②旅人になって隣の国へ。隣の国の子どもはどんな問題を抱えている? 聞いてみよう。説明してみよう。

③自分と途上国の子ども。そして途上国どうし、何が違う? 何が同じ?そして感じたことは?

教材3 比べてわかる 途上国の女の子に必要なこと「シータちゃんの日」

✓「シータちゃんの日」とは・・・途上国にくらす女の子、シータちゃんの日を日本の同年代のあいちゃんの一日と比べ、さらにシータちゃんの弟のアルン君の一日と比べることで、途上国の女の子は「貧困」に加え、「ジェンダーの不平等」から二重の困難を強いられていることを学ぶワーク。



ワークシート

食事はピンク、勉強は青と色ぬりをしていくと・・・あれ?違いを発見!
(プラン・ジャパン提供。制作にはプラン・フレンズも協力。)



1日を紹介する紙芝居



✓活用実践例・・・事務局でのワークショップ「ナツボラ 2014」



シータちゃんの1日を劇にするワークショップ
途上国の現状を学んだあとに、台本をつくり、演じることで、問題をより深く感じ理解していきます。

2. 日本にいる私たちにもできること

✓ ワークショップや授業で提示した「日本にいる私たちにもできること」の例

「ダイヤモンドランキング」
自分たちに何ができるかを考えるワーク。大事だと思うことを、その順番に並べて、なぜそう思うかを発表しあいます。

私たちにできること

- よく知る
- ひとに伝える
- フェアトレード
- 省エネ
- OOO?!
- 地産地消
- 食事を注文し過ぎない 買いすぎない
- NGOなどを支援する
- 活動に参加する

世界の女の子のために 私たちができるアクション

文化祭で調べたことを発信
エジプトのチャイルドと交流しながら村づくりを支援
書き損じはがきを女の子を応援

これも支援なの?と思うことや、具体的に取り組んでいる例を紹介。(調べたことを文化祭で発表、書き損じはがきを集めて支援、途上国の子どもと手紙で交流など)

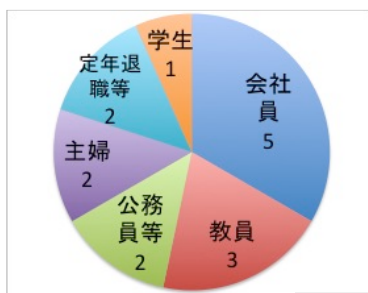
✓ Raise Your Hand ～世界の女の子のために手を上げよう～



ワークショップや授業のあとに有志でアクション。フリップには途上国の女の子への応援メッセージが。

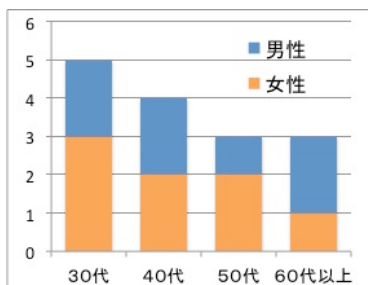
3. プラン・フレンズのプロフィール

属性



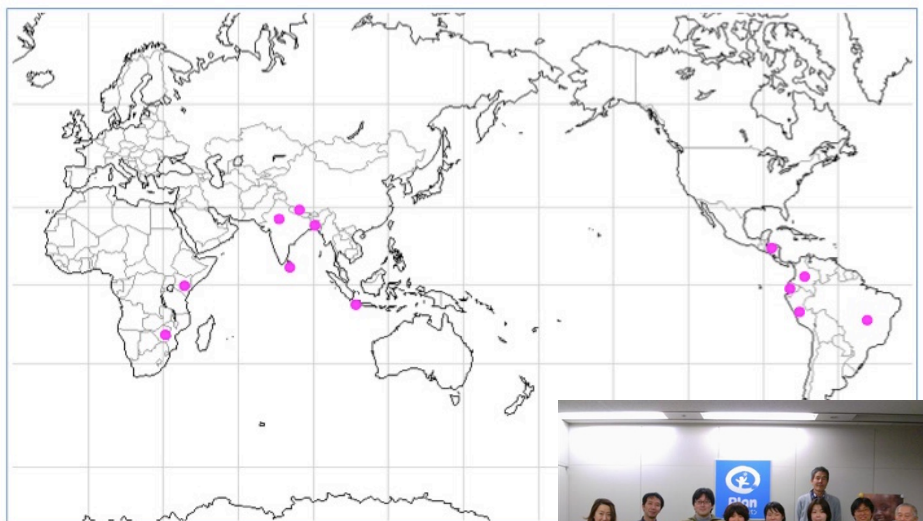
単位:人

年齢・性別



交流のある国

プラン・フレンズは、NGO プランを通じて途上国の子どもと手紙で交流したり、その子がくらす村を訪れたりしている。その交流経験や現地訪問の記録は、ワークショップや授業でも活用している。



●は交流のある国:

ケニア、ジンバブエ、インド、ネパール、バングラデシュ、スリランカ、インドネシア、ホンジュラス、コロンビア、エクアドル、ペルー、ブラジル



写真提供: プラン・ジャパン